

## 『航法理論詳説』 正誤表

< p.80、下から 8 行目から 4 行目 >

誤：

である。眼高を 4.6 m とすれば  $Dip = 3'.8$  また  $Par = 0'.15$ ,  $SD = 16'$  とし、太陽真高度が  $0^\circ$  になるときの太陽下辺の視高度を求めるに、 $a_0$  を  $18'$  とすれば、表 5.1 より  $Ref = 30.8$  であり、 $a_t = 18 - 3.8 + 0.15 + 16 - 30.8 = -0.45$  となり、視高度が  $18'$  から  $19'$  の間にあることがわかる。当然、肉眼での観測では、角度で  $1'$ ,  $2'$  の大気差の場合、あまり意味はないだろう。

正：

である。ここで視高度を  $a_{app}$  と表記することにして、眼高を 4.6 m とすれば  $Dip = 3'.8$  また  $Par = 0'.15$ ,  $SD = 16'$  とし、太陽真高度が  $0^\circ$  になるときの太陽下辺の視高度を求めるに、 $a_0$  を  $18'$  とすれば、 $a_{app} = a_0 - Dip = 14.2$  であるので、上記表より  $Ref = 31.6$  であり、 $a_t = 18 - 3.8 + 0.15 + 16 - 31.6 = -1.25$  となる。 $a_0 = 20'$  とすれば、 $a_0 - Dip = 16.2$ ,  $Ref = 31.2$  であるから、 $a_t = 1.15$  が得られる。したがって真高度  $0^\circ$  は測高度 ( $a_0$ ) が  $18'$  から  $20'$  の間にあることがわかる。このように視高度から大気差を求めるのが本来の計算法であるが、眼高が低いので測高度による大気差を求めても大きな問題を生じない。しかし、眼高が高い場合には計算法に気を付ける必要がある。当然、肉眼での観測では、角度で  $1'$ ,  $2'$  の差について問題にする意味はないだろう。